

017

受験 番号					
----------	--	--	--	--	--

令和7年度 獨協医科大学医学部  
一般選抜（前期）第2次試験

小論文試験問題

（試験時間60分）

注意：

1. 開始の合図があるまでは、この問題冊子を開かないでください。
2. この冊子は4ページです。他に下書用紙1枚と解答用紙1枚を配付します。
3. 問題の内容に関する質問は原則として受け付けません。  
ただし、印刷が不鮮明な場合は、挙手の上監督員に申し出てください。
4. トイレに行きたいときや気分が悪くなったときは、黙って挙手をしてください。
5. 受験番号を所定欄すべてに記入してください。
6. 解答は必ず配付された解答用紙に記入してください。問題冊子、下書用紙への記入事項は採点の対象としません。
7. 試験終了後、問題冊子、下書用紙、解答用紙のすべてを回収します。
8. 試験開始後30分間および試験終了前5分間は退出できません。

（令和7年2月7日実施）

試験問題は次頁から

問題 次の文章を読んで、以下の問に答えなさい。

### 100人に1人？

ふと思いついて、一時期、人権研修の最初の方で、次のようなクイズをやっていた。

「みなさん、日本の全人口の中で、“障害者手帳をもっている人”ってどれぐらいいると思いますか？  
カンで結構ですので、このへんかなと思うところで手をあげてください」

そしてホワイトボードに次のように書く。

100人に1人

75人に1人

50人に1人

25人に1人

上から順に、「100人に1人と思われる方は？……」と聞いていって、手を挙げてもらう。これまで、一番多かった答えは「100人に1人」か「75人に1人」だった。

「25人に1人」のところで手を挙げるのは、多くて一割、少なければゼロだ。こういう問いを出されると、みなさん、自分の身の周りを振り返るのだろう。障害をもった同級生は学年に一人か二人だった、大きい駅では、時々車いすの人を見かける……そんな感じで「100人/75人に1人」という数字が出てくるのだと思う。

正解は、「約23人に1人」ということになるので、選択肢では「25人に1人」が一番近い。[なおこれは2013年時点の数字。2023年には約16人に1人になっている]。そう説明すると、会場は必ずどよめく。ほんとに？ そんなに多いの？——という戸惑いの表情が見える。つまり、「これぐらい」と多くの人が思っているよりもずっと多くの障害者（手帳取得者に限っても）がいるのだ。

しかし実感がわからない。「実際の障害者手帳をもっている人の数」と、一般の人が「実感として思う数」との間に、なぜこれほどまでギャップがあるのだろうか。答えがあるわけではないが、主に二つの背景が挙げられるだろう。

### 隔離されている人たち

一つめの背景は、「隔離されていて、存在を知らない人たち」が多くいるということだ。入所施設に入っていたり、長期入院している人たちは、そもそも出会うことがない。それも、幼少期から支援学校の寄宿舎に入っていれば、「近所の友達」はできないし、入所施設に入れば終生そこで暮らすことになる。精神科病院に長年入院している人は、症状は軽快していても「受け皿がないから」退院できなかつたりする。かれらは「障害が重いから」ではなく、根強い偏見や地域資源の不足といった社会のあり方のせいで、ほかの人と分け隔てられている。

### 外見でわからず、言わない人たち

二つめの背景は、隔離されているわけではないが、「外見でわからず、気づかれない人たち」が非常に多いということだ。たとえば聴覚障害、内部障害（心臓疾患、オストメイト着用者など）、精神障害、軽度の知的障害のある人などは、まず気づかれない。実際のところ「外見でわからない」場合のほうが圧倒的に多いのだ。

私は非常勤先で「障害者と人権」という講義をもっているが、授業後に提出してもらったコミュニケーション

オンカードで、「実は……」と自分の障害や持病を打ち明けられることがしばしばある。オープンにしているという学生もいるが、誰にも言っていない、家族しか知らないという学生もいる。個人情報であり、「特に言う必要がない」ことでもある。ただ、やはり気になるのは「怖くて言えない」という声だ。「変な目で見られたくない」と思ったり、就職活動への影響を心配したり……というコメントだ。

### 「見えない障害」を“見える化”する——ヘルプマークについて

「ヘルプマーク」という赤色のタグを持ち物につけている人が増えてきた。

自分には「助けてほしい」と思う瞬間がある、ということを示すマークであり、具体的には難病、精神障害、聴覚障害などなど見目で分かりづらい障害の人がつけていることが多い。このマークには障害の証明を求められないことが画期的で、自分が「何等かの配慮を受けたい」と思ったら誰でも持つことができるマークである。

「見えない（外見ではわからない）障害」については、行政による啓発も行われている。「知られていないために困ることがある人たち」がいるからこそ、「ヘルプマーク」が考案され、普及啓発がなされている。「ヘルプマークをつけた人を電車で見かけたら席を譲りましょう」といったキャンペーンが学校や社会福祉協議会で行われ、電車の中の吊り広告でも見かける。ヘルプマークは、「なんらかの事情がある」ことを伝える道具であり、「対話のきっかけ」として使えるものだ。その有用性は確かにある。

### 「見えない障害」の複雑さ

けれども、外見でわからない障害をもった人は「常にヘルプマークをつけ、求めれば説明しなければならない」と捉えられてしまえば、それも抑圧になりかねない。

私には難病をもつ友人がいる。彼女は一目、元気な「関西のおばちゃん」だが、体力の電池が減りやすく、一日出かけたら、翌日はふとんで過ごさなければならない。痛みやしびれ、だるさを慢性的に抱えている。私が難なく使える調理器具や洗濯ばさみが、彼女にとってはハードな物体になる。体力を消耗しないよう工夫をしたり、自分の身体にあった道具などを用意したりしても、「あたかも健常者しかいないかのような社会」の中では、万策尽きて倒れるような事態が起こる。私は彼女と仲良くなってはじめて、こうも複雑な体調不良があることを知った。友人はある難病の患者会の事務局をきりもりしているが、同じ病名でも症状のあらわれ方は千差万別で、治療の段階によっても違うし、体調の波もあるし、何ひとつ一般化できないのだそうだ。

### 「わかりやすさ」を求めてしまうことも障壁になる

個々の難病患者団体は、「私たちの病気についてもっと知ってください」というパンフレットを作ったりする。それは有意義なものだが、限界もある。そして、すべての難病に詳しくなることは、誰にもできない。

ヘルプマークをつけていることで安心して電車に乗れるという人がいる一方で、目立ちたくない等の理由でつけない人もいる。さらに、私が授業で「ヘルプマークをつけている人の中にも、席を譲られることを希望しない人もいる（立つ、座るといった行為が身体に負担になる場合など）」と説明すると、学生はめんどくさそうな顔をしてくる。席を譲るべきなのかどうか、はっきりしてほしい、とマジョリティは思ってしまう。

しかし難病者はマジョリティの「わかりやすさ」への期待にこたえるために生きているわけではない。

その時その時の必要性や体調に合わせて、どこまで説明するかを決めたり、やり過ぎしたりしてサバイブしているのである。「説明してもわかってもらえないから、いっそもも言わない」という人もいる。

明らかに「大変そう」に歩いている人には、サッと手がのびる。だが、大変そうに見えない難病者が「このドアが重たくて開けられないので、手伝ってください」と合理的配慮を求めても、信じてもらえなかったりするそう。健全者中心の社会でできあがってきた「価値観や慣行（習慣、常識、当たり前）」は変わりにくい。それが障壁になりうることも、もっと知られるといいと思う。

松波 めぐみ 著

『社会モデルで考える』ためのレッスン——障害者差別解消法と合理的配慮の理解と活用のために』

(株式会社生活書院) 2024年7月31日発行

出題の都合により一部改変

問1. 本文を200字以内に要約しなさい。

問2. 本文の内容について、あなたの考えを400字以内で述べなさい。